

創世記第32章23－32節

テモテへの手紙二第3章14－第4章5節

ルカによる福音書第18章1－8節

旧約日課は、イスラエルという名前の起源となったお話です。新しい聖書日課では、それまであった4節から9節が省略されていますので、少し唐突に始まりますが、ヤコブは、それまでいた二人の妻（姉妹レアとラケル）の父である伯父ラバンのもとを去り、関係が悪くなっていた、双子の兄エサウとの和解のために会いに行くのです。その途中、ヤボク川で起きた出来事です。ヤボク川は、ヨルダン川の支流、現在のヨルダンにあるザルカ川であろうと推定されています。

「だが彼は夜中に起きて、二人の妻、二人の召し使いの女、それに十一人の子どもを引き連れ、ヤボクの渡しを渡って行った。ヤコブは彼らを引き連れ、川を渡らせ、自分の持ち物も一緒に運ばせたが、ヤコブは一人、後に残った」（創 32:23-25）とある通り、ヤコブは、自分の一行を渡らせてた後、ヤボク川にとどまります。ヤコブだけが川べりに留まったのは、伯父ラバンとの関係が悪くなり逃げてきているので、その追撃を防ぐためでしょう。そこに突然、何の説明もなく、「すると、ある男が夜明けまで彼と格闘した」（創 32:26）と格闘が始まります。そして、ヤコブが勝つのですが、その男は実は神様であり、「男は言った。『あなたの名はもはやヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ』（創 32:29）と告げて、イスラエルという名前が『聖書』に登場することとなります。

人間が神様と取っ組み合いをする、しかも、人間が勝つ？誠に不思議なお話ですが、イスラエルという名前の語源は、「あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ」ということなのです。「イスラエル」という言葉自体は、「神が戦う」とも「神と戦う」ともとれる言葉です。ヤコブのお話からは、彼が神と戦ったから、神と戦うのがイスラエルかと思えますが、どちらが正解かは不明です。しかし、『聖書』全体から考えてみますと、イスラエルという言葉をも二つの意味にとれることは、イスラエルという集団の特性を示しているように思えます。それは、イスラエルとは、主なる神様が選び、そして神様が戦って守る集団であると同時に、イスラエル自身が調子にのって思い上がり、主なる神様から離れてしまう、神に背き、間接的であっても神様と戦ってしまうこともある集団であるからです。『聖書』は、そのようなイスラエルの歩みを通して、それを読むものに何を学ぶのか、あるいは何を信じているのかを教えるのです。その意味でイスラエルは、『聖書』を読む人にとってのいろいろな意味での範例となる集団に他ならないのです。

さて、本日の使徒書は、『聖書』の中で「聖書」について言及している有名な箇所です。ここでいう「聖書」は、初代教会の時代ですから、教会で「旧約」と呼ばれる部分です。

この箇所は、全体の流れからいえば、小見出しで「最後の勧め」とある部分（3:10-17）の途中です。手紙の著者は、「私（パウロ（仮））」に倣い歩み、迫害に耐え、悪に惑わされず、「**だがあなたは、自分が学んで確信した事柄にとどまっていなさい。あなたは、それを誰から学んだかを知っており**」（2テモ 3:14）と、まず教えられたこと確信し、誰から何を学んだかを確認することを勧めています。そして、「**また、自分が幼い頃から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに至る知恵を与えることができます**」（2テモ 3:15）と『聖書（旧約）』を重んじるようにと勧めているのです。

「誰から学んだか」、そして、『聖書（旧約）』、この二つは、「伝統・伝承」と「聖書」と言い換えることができると思います。なぜ、「誰から学んだ」かを、すなわち「伝統・伝承」を改めて重んじるのか、それは、教会の教えとは、従来のユダヤ教の教えそのものではなく、また、ヘレニズム社会の様々な知識や知恵でもなく、イエス様とその教えを引き継いだ人々の教え、使徒たちの教えであるからです。次の、なぜ「聖書」をあえて大切にすると教えているのか、それは教会がユダヤ教と別離し、独自の歩みを確立し始めた時、少しずつ『聖書（旧約）』を軽んじる傾向があったからだと思われます。また、15節に「**知恵を与える**」とありますが、一般的に異端のひとつといわれるグノーシス主義（知恵主義）に対抗した言葉という意味ではなく、『聖書（旧約）』が、信仰生活の上で大切な知恵を与えるというニュアンスだと思います。ここも今まで大切にしてきた『聖書（旧約）』をこれからも大切にしなさいという勧めです。先ほど触れた通り16節に「**聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたもので**」とあります。ここので「聖書」は15節の言葉とは単語が違い、聖書全体というよりも各文書という意味です。また「**神の靈感を受けて書かれたもので**」という部分は、文字通りには「神が息を吹きかけられた」あるいは「神の靈感の」という形容詞の一語で記されています。ここは解釈するのが難しいと部分ですが、一つ一つの聖句が、人間の考えではなく（書いたのは人間ですが）、神の霊（聖霊）が満ちている大切な文章であるという意味にとるのが良いと思います。

本日の使徒書は、最後に「**何事にも身を慎み、苦しみに耐え、福音宣教者の働きをなし、自分の務めを全うしなさい**」と、それまでの事柄をまとめています。しかし、これはまとめの勧めであって、それに至るまでの事柄、すなわち『聖書』から学ぶこと、使徒たちからの教えから学ぶこと、そして、聖霊の働きに導かれることが大切なのです。それらすべてを一つとしている歩みが、礼拝です。礼拝から、世界の平和へとつながる、たくさんの教会の働きを生み出していきたいと思います。